

ヨハネによる福音書 16 章 4 節－15 節
「真理の霊が来ると」

《1》

次の日には十字架にかかれることになる主イエス・キリストが、前の晩、弟子たちに親しくお話をされています。

それは 13 章から始まって、ここまですっと続いています。もう少し続きます。今朝の個所では、聖霊、主イエス・キリストの御霊のことが中心です。

——主イエス・キリストは弟子たちのもとを去って行かれるが、それは彼らの利益となる。それによって聖霊が遣わされることになるからである。

さて、ここで基調となっているこの場の雰囲気、気分というのは、悲しみや憂いが重くのしかかっている、といったものだったでしょう。

主は弟子たちのもとを去って行かれようとしています。主をお遣わしになった方である父なる神さまのもとへ、行かれようとしています。

理由や目的が何であれ、別れには寂しさが伴います。たとえ嬉しいことであっても、誰かが去って行くなれば、残される者には悲しみがあるでしょう。

ところで、その前に、主はご自身が去って行かれることで生じる利益について語られる前に、こういうことを言われます。

「あなたがたは誰も、『どこへ行くのか』と尋ねない。むしろ、私がこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされている」。

誰も、どこへ行くのかと尋ねない、と言われるのですが、——振り返って考えると、14 章 5 節で、トマスはイエスさまにこういう質問をしています。

「主よ、どこへ行かれるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道を知ることができるのでしょうか」。

ここに、尋ねているトマスがいる、と言えます。ではなぜ、主は、誰も尋ねないと言われるのか。やはり、こういうことは気になります…。

でも、これは難しいことではないでしょう。トマスはその時点で、まだ事態をそれほど深刻には考えていなかったのではないかと。しかし、やがて、イエスさまのお話が進むにつれて、これは容易ならぬことが起ころうとしていることがはっきりとわかってきます。

トマスだけではなく、ほかの弟子たちも一様に、悲しみに押し潰されそうになり、とてもではないが、どこへ行かれるのですか、と尋ねることができないでいた、ということでしょう。

また、最初のトマスの質問は、いわば純粹に、「どこへ」行かれるのですか、と尋ねるものでしょう。

これに対して今、主が、誰もどこへ行くのか尋ねない、と言われることには二つの意味が込められているのではないかと。一つは、どこへ？ということ。これはトマスの質問の意図と同じです。

そして二つ目のこととして、それ以上に、なぜ？という意味合いが、そこにはある

でしょう。

どうして主よ、あなたは去って行かれるのですか？ このことを尋ねることができない。あまりにも辛く、悲しいことなので、それに触れることができない。弟子たちはそのような状態でした。

その悲しみに主は、敢えてという形で、触れられています。なぜ敢えてと言うかと言えば、彼らの今の悲しみは、決していつまでも続くわけではないからです。

《2》

私がいなくなっても、決して悲しまなくてよい。7 節「しかし実を言うと、私が去って行くのは、あなたがたのためになる。私が去って行かなければ弁護者はあなたのところに来ないからである。私が行けば、弁護者をあなたがたのところへ送る」。

主が父なる神のもとへ行かれるのが、弟子たちの利益となる。弁護者が来られるからです。

弁護者というのは、前にも何度か述べていますように、助け主、慰め主であり、そば近くあって私たちを励まし、支えてくださる、私たちの強い味方です。つまり聖霊です。

この、聖霊が遣わされ、私たちを助けてくださる、ということは、今までにも幾度か言われていました。

14 章 16 節「私は父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる」。

15 章 26 節「私が父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方が私について証しをなさるはずである」。

聖霊が遣わされる利益は、どこにあるのでしょうか。それは一言で、人となられた主イエス・キリストには、人間としての限界があるためです。勿論、主に限界などありませんが、人間となられて地上を歩まれたという、その限りで、私たち人間と同じような制約を受けられる、ということですね。

主はほぼ 2000 年前に、ユダヤのベツレヘムという地に、ユダヤ人の子としてお生まれになりました。もし、主イエス・キリストに直接お会いしなければ、救いは覚えない、ということであれば、どうなりますか？

言うまでもありません。その後のすべての人たち、勿論今の私たちも、誰一人救われることはない。ユダヤという特別な場所に、限られた時だけ打ち上げられた花火のようにして、救いというものは人類から消え去ってしまうでしょう。

しかし、聖霊が来てくださる。これにより、14 章 16 節で言われていたように、主が「永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる」。——聖霊は、主イエス・キリストの御霊だからです。

聖霊は主の御霊である、ということの意味は、まず、聖霊が主イエス・キリストの代わりである、ということです。野球のピンチヒッターのようなものと言ってよいでしょうか。地上において、主イエス・キリストの働きを。代わりに続けられる。

しかし、単なるピンチヒッターではありません。本人の代わりに本人が出ているよ

うなピンチヒッターです。つまり、主イエス・キリストと聖霊とは同じ、ということでもあります。

聖霊は、主イエス・キリストの代わりであるが、同じでもある。これほどに緊密で親しい関係にあります。

ですから、そこに相違とか食い違いなどということが生じるはずがありません。

15章26節で、真理の霊がイエスさまについて証しをなさる、とありました。同じ働きをされているのですから、それがそのまま、証しとなります。

今日の13節で、「その方（聖霊）は自分から語るのではなく、聞いたことを語る」とあり、14節で、「その方は私に栄光を与える。私のものを受けて、あなたがたに告げるからである」とあります。

聖霊は聞いたことを、つまり、主イエス・キリストのものを受けて、私たちに告げてくださる。ですから、聖霊が告げることは、主イエス・キリスト御自身が告げてくださることと少しも変わることがない。

また、15節では、「父が持つておられるものはすべて、私のものである。だから私は『その方が私のものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである」と言われています。

最初に、父なる神と御子なるイエスさまとが、同じものをもっておられる、ということですね。同じ御旨であり、同じ働きをされる。——だから、聖霊なる神さまは、主イエス・キリストは勿論、父なる神さまとも同じ御旨で、同じ働きをされるということです。三位一体なる神さまとその恵みが、ここで告げられています。

三位一体の神さまの私たちに対する思い。それは、私たちが神さまを（また、主イエス・キリストを、聖霊なる神さまを）信じて、救われて、いつまでも確かな恵みに生かされることです。

そのために、まさに三位一体の神さまが総がかりです。私たちの救いのためのご計画を立てられ、それを実行され、いつまでも救われた者を守り続けてくださいます。

恵みに感謝しましょう。

また、ここで、12節以下ですが、主は、まだ話しておきたいことがたくさんあるが、今あなたがたには理解できない。しかし真理の霊が来ると、真理を悟らせてくださる、と語っておられます。

これは、弟子たちがこの時に置かれた状況を配慮されて、一度にすべてを語るようなことはされなかった、ということですね。

幼稚園の子どもにも微分積分の話をして、何も通じません。時が来れば、初めてわかることもある。そして、それは聖霊が告げてくださる。父なる神と主なるキリストの御旨どおりに、そのことをしてくださいます。

一つだけ例を挙げれば、異邦人の救い、といったことです。このときの弟子たちはそれを聞いても、あまりぴんと来なかったでしょう。そういう事柄があります。

《3》

さて、最後になりますが、聖霊が来たなら、どうなるか。このことに関して、8節

以下で、聖霊が、世の誤りを明らかにする、とされています。

世の誤りを明らかにされることによって、私たちに、いよいよ信仰に堅く立って歩むようにと、注意を与え、また励ましてくださっている、ということです。

8 節「その方が来れば、罪について、義について、また裁きについて、世の誤りを明らかにする」。

三つのことが言われていますが、まず罪について。それは「彼らが私を信じないこと」。

物を盗んだり、嘘をついたり、といったようなことも決してゆるがせにできない罪です。しかし、何よりも主イエス・キリストを信じないこと、これが罪である。

罪とはすべて、神さまの御心に反することですね。そして神さまは主イエス・キリストへの不信仰を、その最たるものであると言われます。

次に、「義については、私が父のもとに行き、あなたがたがもはや私を見なくなること」。

私たちが神さまに対して義とされる（正しい者とされる）。それは私たちの力や働きによるものではありません。主イエス・キリストが十字架において私たちのために贖いを成し遂げてくださり、復活し、天に昇られて、やがて見えなくなることによつてです。

そのように、神さまのほうからの一方的な恵みによって、私たちは罪を赦されて、神さまに対して義とされるのです。

そして「裁きについては、この世の支配者が断罪されることである」。

この世の支配者とはサタンですね。そして、そのサタンは断罪される。必ずそうなる。既に 12 章 31 節でイエスさまはこう言われています。「今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される」。

この世の支配者が断罪され、追放されるのは、主イエス・キリストが既に世に勝っているからです。

一連のお話の最後になる 16 章 33 節で、主はこう言われています。

「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている」。

この世は、罪も、義も、裁きも知りません。その誤りを、聖霊が明らかにされる。

そして、信仰をもって、救いの恵みと喜びの中で、ずっと歩み続けていくように！主イエス・キリストご自身、そして父なる神さまと聖霊なる神さまが、一緒になられて、私たち励ましてくださっています。

信仰をもって生きる。それは確かな希望と勝利の中で生きることです。

2021 年 2 月 7 日 朝拝

恵みと憐れみに富みたもう父なる神さま、尊い御名を崇めます。

主イエス・キリストは十字架と復活の後、弟子たちのもとから去って行かれようとしています。そこに今の私たちの大きな霊的な利益があることを覚え感謝いたします。

父・子・聖霊なる神さまが、全く思いを同じくされ、同じ私たちの救いと永遠の命という目的のために、御業を成し遂げてくださる恵みを、感謝いたします。

神さまの愛と恵みの中であって、いつまでも喜びと希望と勝利の中で、生きる者とさせてください。あなたが与えてくださる勇気をもって、一人一人、信仰の道を歩ませてください。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司